**1940s-1950s**

23 September 2023

豊島 実和

この時期の議論の焦点は、翻訳可能性（translatability）

・言語間、文化間の違いを、翻訳でうまく処理することができるか

・翻訳における問題点を洗い出し、解決可能か否かを判断し、翻訳方法を公式化する

・この時代の学問における流行の影響を受け、様々な意見が出されるが、その両極端は懐疑主義（哲学的立場）と楽観主義（経験主義的立場）

Willard Van Orman Quine ウィラード・ヴァン・オーマン・クワイン (Brower 1959)

・北米で盛んな分析哲学を背景にした極端な懐疑主義。1959年の“Meaning and Translation”で「翻訳の根本」（radical translation）をについて議論。「それまで扱われていない民族の言語を翻訳する」とどうなるか。

・外的な刺激（stimulus）がある状況でさえ、根本的な意味の不確定性（indeterminacy）を克服できない。「英語母語話者である西洋人の言語学者」が「ジャングル言語を話す先住民」と出会った場合を想定。ただし、分析哲学の抽象概念の範囲にとどまる議論であり、人類学的、地政学的な発展はない。

・翻訳とは「分析仮説」（analytical hypotheses）に基づくもの。外国語の語句が翻訳先の言語の語句と同等の意味を持つという考え方に基づいている。その上で辞書や文法が作られるが、それを根拠に「外的刺激」と「意味」が対応関係にあるとは言えない。先住民と言語学者の「概念の枠組み」（conceptual schemes）が異なる可能性があり、そうであれば解釈も違ってくる。両者の枠組みはそもそもの基準が異なるもので、翻訳を評価する際の基準も異なる可能性。

・翻訳は、より実用的なものであるべきだと考える。意味とは慣習的で、社会的に定められるもの。翻訳とは、元のテキストを、翻訳先の文化の言葉遣いと価値観に従って書き換えること。「真実とは自身の世界観の中で成り立つものであり、意味とは母語の枠組みの中で成り立つものである。」

ヨーロッパの哲学の流れ、特に聖書解釈学や実存的現象学では、言語的、文化的な違いによって、翻訳は難しいものになると考える。

Martin Heidegger マルティン・ハイデッガー

・1946年に「アナクシマンドロスの箴言」において、考え方の枠組みが異なるために、古代ギリシャの哲学を現代語に訳すのは難しいと述べる。

・古典学者による翻訳は疑わしい。古典学者は、アナクシマンドロスを、プラトンやアリストテレスに続く哲学の流れに沿う形で理解するので、観念論や経験主義の視点を持ち込むことになる。ギリシャ時代の作品を、宗教的な見方、科学的な見方で訳してしまう。

・Heideggerの解決策は現実主義的で文学的。Schleiermacherの考え方（「読者を元のテキストに連れていく」）に立ち戻る。古典的な言葉遣いをして、日常的な言語とは異なる詩的な表現を用いる（Heidegger 1975）。

・語源学的な説明をすることで、ドイツ文学は古代ギリシャ文学の流れを汲むものであると主張する。そのように主張することで、アナクシマンドロスを理解する際に、現代的な感覚やHeideggerの見解を持ち込むことになる。

文学批評における翻訳可能性の議論では「文学においては、スタイル、ジャンル、伝統などの違いがあるので、外国語の文学作品を翻訳することは不可能」と考える。

Vladimir Nabokov ウラジーミル・ナボコフ

・文学とは、他国の文学の影響を受けつつも、国ごとに独自の発展をし、傑作が生みだされるような場。そのためには「理想的な翻訳」（ideal version）が求められるが、現実的には不可能（Nabokov 1941）。

・アレクサンドル・プーシキンの韻文小説『ニヴゲーニイ・オネーギン』の複雑な音声的特徴や隠喩について説明。アングロサクソンの詩に見られる言い回しを使わず、大量の注を付ける形で、学術的な翻訳を行う（Nabokov 1955）。

・「翻訳先の言語の話者（given public）が持つ概念や先入観に合うように」言い換えた翻訳は最悪である（Nabokov 1941）。ただしNabokov自身も、翻訳先の言語の話者（の一部であるエリート）の価値観に沿う翻訳をしたと言える（原文の言語に堪能で、原文の文学の歴史的知識を持ち、原文の形式的特徴に詳細な注を付けることのできる学者が、学術界に向けた逐語訳的な翻訳を行う）。

・Nabokovの考え方は、いかにも1940年にアメリカに移住したロシア人作家らしい考え方。ロシアの言語と文学作品に強い郷愁の念を抱き、アメリカの消費文化の均質性を軽蔑する。当時、文学を英訳する翻訳者で、Nabokovに同調する者は極めて少数。当時の風潮は、翻訳先の言語における「詩的」（poetical）な表現を用いる翻訳で、Nabokovはそれを嫌っていた。

Dudley Fitts ダドリー・フィッツ（アメリカの詩人、批評家、翻訳家）

・Nabokovを批判。詩の翻訳においては「野心を捨て、自由訳をすべき。つまり、新しい別の詩を作るつもりで訳すべき」（Fitts 1959）。現在のアメリカ英語で、社会的に受け入れられる口語体を用いて、自然な詩として完成させるべきだと主張。

・古典やラテンアメリカの作品を翻訳。翻案（adaptation）の傾向が強い。アリストファネス（アテナイの喜劇作家）の現代英語訳の評価が非常に高い。ただし、自身のギリシャ語の詩の翻訳が時代錯誤的（anachronistic）であるかもしれないという認識を持ち、「ZeusをGodと訳したことで、一神教であるかのような」訳になってしまっていると、自ら指摘している（Fitts 1956）。

楽観主義的な主張を行っていたのは、言語学的分析を行う人々。

言語学的立場から翻訳可能性について論じる場合、翻訳における問題点を指摘し、その解決策を示すという形になる。

「言語とは、意味を構成する本質ではなく、意味を伝えるために使うものだ」という経験主義的な立場。

Chaim Rabin (1958) ハイム・ラビン

　“The Linguistics of Translation”の冒頭で、翻訳には「2つの要素がある。1つは意味（すなわち、ある実在（reality）を指し示すもの）で、もう1つは、2つの異なる言語において、その実在を指し示す方法が異なるという事実である」と記している。しかし、その翻訳が成功しているかどうか（現実をうまく指し示すことができているかどうか）を判断する際に、どちらの言語の実在を基準とすべきかという問題が残る。

Eugene Nida (1945) ユージン・ナイダ

・アメリカ聖書協会の研究を基に、言語間で実在が異なる場合について考察。十分な「文化的情報」を得て、民俗学的知識に基づいて翻訳を行うべきだと主張。

・「マヤ族（ラテンアメリカの先住民）に、『トウモロコシ畑を作るために草木を刈った場所以外で、草木のない土地』と説明しても、想像もできないだろう。したがって、desert（砂漠）はabandoned place（打ち捨てられた土地）と訳すしかない。」そうすることで「彼らの文化において理解できる表現（cultural equivalent）で、『パレスチナの砂漠』」を表すことができる。

・この場合の翻訳は、言い換えの翻訳である。言語的、文化的な差異を極力排除し、翻訳先の言語において、同じような意味を持つ表現を再構築する。

Roman Jakobson (1959) ロマーン・ヤーコブソン

・翻訳可能性の議論に、記号論における反映という概念（semiotic reflection）を取り入れたことの意義は大きい。経験論的な立場の意味論に疑問を唱え、意味というのは実在を指し示すものではなく、無限に続く記号なのだと述べた。つまり翻訳とは、「2つの異なる記号体系間で、同じ内容のメッセージ」を書き換える作業である。

・Jakobsonは翻訳における解釈という過程を過小評価している。記号の書き換えとは、単に元のメッセージを別の記号体系に移すということではなく、変容させるという過程が生じる。

・ただし、Jakobsonは、特に詩において、文化的な言語使用の差異に着目しており、「文法範疇（grammatical category）は、意味の面で重要な機能を担っている」ため、翻訳によって別の記号体系に移す際には「創造的な置き換え（creative transposition）」が求められる、としている。

Jean-Paul Vinay and Jean Darbelnet ジャン=ポール・ヴィネイ、ジャン・ダルベルネ

・1958年に非常に影響力を持つ論文を発表したカナダの言語学者で、仏英翻訳に比較文体学の立場から切り込んだ。彼らが作成した翻訳トレーニングのための教科書は、50年以上、最良の教科書として用いられた。

・言語的、文化的な差異を経験主義的意味論に落とし込む。「同じ内容のメッセージとは、同じ状況（situations）について述べているものということ」であり、状況とは言語化されていない実在（reality）を指す。

・意味とは文化的構造であり、翻訳においては言語的操作と「メタ言語的情報（2つの言語社会における、文学、科学、政治等の状況）」との密接な関係を意識すべき（Vinay and Darbelnet 1995）。

・実用面、教育面において、彼らの研究成果は非常に大きな意味を持つ。そのため、翻訳可能性という哲学的問題への取り組みが不足していることや、翻訳における言語使用に対する態度が保守的で規範的であることは、あまり指摘されない。彼らの教科書は、入念に作り込まれた方法論を書き記したものであり、同時に世界の政治経済学からの翻訳に対する意見をも取り込んでいる。

Reuben Brower ルーベン・ブロアー

1959年のアンソロジーで、翻訳に対する批評の潮流をまとめた。概念的にも方法論の面でも立場が異なるはずの哲学者、言語学者、文学評論家たちが、翻訳は言語と文化の問題であるとして興味を示し、参加。翻訳家、翻訳研究者、作家も参加し、深い議論を展開。

Valéry Larbaud ヴァレリー・ラルボー

・1946年に『聖ヒエロニュムスの加護のもとに』という評論集を出版。聖ヒエロニュムスは、文法等にとらわれず、1文ごとの意味を対応させる翻訳（sense-for-sense translation）の守護聖人とされる。Larbaudの文章は学識を感じさせつつ文学的であり、Quintilian、Alexander Frase Tytler、Paul Valéryといった理論家や作家を彷彿とさせる。

・Larbaudは翻訳を、アリストテレスによる詩学や修辞学の範疇と認識していたが、現代的な関心も持っており、翻訳には「異国の空気」（foreign air）が持ち込まれるべきだと考えていた。それに対しては「純粋主義者」（purists）からの抗議を受けるが、Larbaudは自国語を盲目的に愛する人々は「完全に無知な人々以上に、文化の本質に対する脅威となる」と述べている（Larbaud 1946）。

・翻訳家の仕事への世間の誤解に立ち向かうには、理論と歴史とを結び付ける手法で翻訳を行うしかない。